

国 語 科

- 事例 1** 複数の古典を比較しながら読むことを通して、思考を深める
 p. 10
- 事例 2** 書くことの充実を図る授業例
 ～ 「自己との対話」に向けて ～
 p. 20
- 事例 3** 主体的な対話活動の実践
 ～ 効果的な説明から質問へ ～
 p. 32

研究協力委員

栃木県立今市工業高等学校	教諭	宍戸 朋子
栃木県立小山南高等学校	教諭	菅原 貴美
栃木県立栃木高等学校	教諭	井上 孝志

研究委員

栃木県総合教育センター研修部	指導主事	塩野 友佳
----------------	------	-------

○ 調査研究にあたって

平成 29 年 3 月 31 日に公示された中学校学習指導要領では、教科の目標を「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とし、以下の三つの目標を掲げている。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特徴を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

これらの目標は、他教科と同様に、教科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、その柱に基づいた目標として位置付けたものである。そして、「中学校学習指導要領解説 総則編」(平成 29 年 7 月)には、これらの資質・能力を育成するために、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進が示され、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる。」と述べられている。このような目標の在り方、授業改善の視点は、今年度中に公示予定である、高等学校学習指導要領においても同様の案が示されている。

このような国の動向を踏まえながら、本調査研究を進めるにあたって、研究協力委員と高等学校国語科の授業を振り返り、普段の授業における課題について検討を行った。アクティブ・ラーニングが形式化している、グループ活動やペアワークの方法をもう一度見直してはどうか、といった様々な意見が出される中で、本調査研究においては、次の三点を主な課題として設定した。

- ① 訓詁注釈中心の古典の授業の改善、作品そのものを読み味わうことを充実させる。
- ② 生徒の「書くこと」への苦手意識の払拭、段階的に「書く」活動を単元に取り入れる。
- ③ その場限りの授業から、生徒が授業と実生活のつながりを意識できる授業へ。

これらを念頭に置きながら、本調査研究では「国語科における主体的・対話的で深い学びとは？」を模索しながら実践に取り組んだ。「読むこと」、「書くこと」、「話すこと・聞くこと」のそれぞれの領域ごとに、複数の資料を用いたり、いくつかの教材を組み合わせる単元を構成したり、生徒の身近な話題から活動を設定したりといったことを試みた。いずれの事例も、研究協力委員の所属校の実態に即して、生徒の学びの継続、普段の授業改善を意識して取り組んだものである。実践を終え、生徒の思考の深まりや、新たな気付き、自己理解など、様々な成果が見えてきたとともに、改善すべき課題も見いだされた。紙面の関係上、実践の詳細を伝えきれない部分もあるが、研究協力委員とともに取り組んだ、三つの実践事例を紹介する。これらの実践は、研究協力委員が、授業だけでなく、年間を通して様々な教育活動に取り組む中で行われたものであることを十分考慮した上で、参考にしていただければ幸いである。

事例 1 複数の古典を比較しながら読むことを通して、思考を深める	
単元名	古文作品を深く読み味わう
これまでの課題	古文の授業においては、教師が文法事項や重要古語に関する質問を生徒に投げかけ、答えさせながら、専ら現代語に訳していくという教師主体の授業になりがちであった。知識の定着を図る問題演習や逐語訳を行うことに十分な時間を設けているものの、作品そのものを深く読み味わうような活動を組むことが難しかった。
授業改善のポイント	文法事項や現代語訳については、周囲の生徒と協働しながら確認をし、生徒一人一人が主体的に自分の学習として行うものとする。 作品について、関連する他の作品と比較して読むことを通して、新たな見方を得たり、考えが深まったりするような資料の提示、発問の工夫をする。

1 指導観

(1) 本単元について（教材観）

本事例で扱う『土佐日記』は、男性が女性に仮託して書いた初めてのかな日記文学である。冒頭の「門出」は、内容自体は平易で分量も少なく、生徒が自ら既習の文法事項や語彙を活用して解釈を行うのに適している。また、一人一人で解釈を行った上で、漢文日記である『御堂関白記』との比較を通して『土佐日記』という作品の性質を捉え、より深い学びを得られる教材であると考ええる。

本時に先立って、『徒然草』の「花は盛りに」で授業を行った。その際には兼好法師の考えに異を唱える本居宣長の『玉勝間』を、古典作品を多角的に捉えるのに適した資料であると考え、生徒に提示した。

(2) 生徒の実態（生徒観）

学習に対して前向きな生徒が多く、予習の取組は概ね良好で、授業中の話し合い活動なども活発に行うことができる。一方で、古文を苦手とする生徒も多く、文法知識等の定着などは、まだ不十分な状態であるといえる。そのため、予習の段階では、文法事項の確認をきちんとせず、感覚的に現代語に訳していたり、何らかの資料から現代語訳をそのまま書き写したりしている。したがって、授業において予習してある内容について質問をしても、根拠をもって答えることができない生徒もいる。また、話し合い活動は活発に行っているが、表面的な理解や個人の思い込みに終始してしまう生徒も見られ、文章全体の内容については曖昧なまま学習を終わらせている生徒もいる。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

古文の授業における、これまでの課題と生徒の実態を踏まえ、本事例においては、「既習の知識と辞書等を活用し、主体的に調べ考える力」、「二つの文章を比較して読むことを通して、論理的に考えを深めようとする力」、また「他者の意見を聞いて、自らの考えを振り返り深めようとする力」を身に付けさせる。

2 単元の指導計画及び評価計画

○単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
・二つの文章を比較し、違いを読み取った上で、課題について考えようとしている。	・二つの文章を比較して読むことを通して、読みを深め、自分の考えを形成している。	・古文を読むことに役立つ文学史や語句の意味、文法事項等を理解している。

時	学 習 内 容	評価の観点			評 価 規 準	評価方法
		関	読	知		
1	『徒然草』「花は盛りに」の解釈。 ・音読後、ワークシートを用いて個人で解釈を行う。			○	・既習の文法の知識や辞書を活用し、文脈に沿って理解している。	ワークシートの点検
2	『徒然草』「花は盛りに」の解釈。筆者の考えの理解。 ・班で文法事項や現代語訳を確認し、筆者の考えをまとめる。			○	・既習の文法の知識や辞書を活用し、文脈に沿って理解している。	ワークシートの点検
3 (実践1)	『玉勝間』と比較して読む。 ・本居宣長の考えをまとめ、兼好法師の考えと比較する。 ・二者の考えの違いを捉え、自分の考えをまとめる。	○			・二つの文章を比較し、違いを読み取った上で、課題について考えようとしている。	行動の観察
			○		・本居宣長と兼好法師の考えの違いを捉え、根拠を明確にして自分の考えを形成している。	ワークシートの点検
4	『土佐日記』「門出」の解釈。 ・『土佐日記』の文学史における位置付けを理解する。 ・音読後、ワークシートを用いて、個人で解釈を行う。			○	・『土佐日記』の文学史における位置付けや、既習の文法の知識や辞書を活用し、文脈に沿って理解している。	ワークシートの点検
5	『土佐日記』「門出」の解釈。 ・班で文法事項や現代語訳を確認する。			○	・既習の文法の知識や辞書を活用し、文脈に沿って理解している。	ワークシートの点検
6 (実践2 (本時))	『土佐日記』「門出」と『御堂関白記』を比較して読む。 ・二つの作品を読み比べ、気付いた点等を付箋に書き出す。 ・付箋に書き出したことを、班で検討し、『土佐日記』はどのような作品なのかを考え、発表する。	○			・二つの文章を比較し、違いを読み取った上で、課題について考えようとしている。	行動の観察
			○		・二つの文章を比較して読むことを通して、読みを深め、自分の考えを形成している。	自己評価シートの確認

3 本時の展開（6時間中の6時間目）

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準（方法）
導入 10分	前時の復習 本時の目標の確認 ・「なぜ『土佐日記』は女性に仮託して書かれたのか」という本時の問いを確認する。	・前時の内容について簡単に振り返り、「門出」の内容を確認する。 ・本時の問いに対する、現段階での生徒の意見を、板書をして残しておく。	
展開 30分	二つの文章を比較して読む ・個人で『御堂関白記』の一節を読み、「門出」との相違点や類似点を付箋に書き出す。（10分） ・5人1組の班になり、台紙にそれぞれが書いた付箋を貼り出す。 ・貼り出された付箋を分類し、貼り直したり、タイトルをつけたりする。 ・分類してまとめられた付箋を検討し、『土佐日記』の特徴について考え、班としての意見をまとめる。（10分） ・付箋から捉えた特徴を踏まえ、「なぜ『土佐日記』は女性に仮託して書かれたのか」について、班で意見を出し合い、まとめる。 ・班毎に発表する。（10分）	・付箋は二色用意し、相違点と類似点を色分けして書かせる。 ・机間指導を通して、作業が滞っている生徒に支援を行う。 ・似たような意見、同じ観点で書かれたものをまとめるよう促す。 ・班の意見は、A4用紙に太字のペンで書かせる。意見は端的にまとめるよう促す。 ・黒板に掲示し、他の班の意見を共有できるようにする。	【関心・意欲・態度】 ・二つの文章を比較し、違いを読み取った上で、課題について考えようとしている。（行動の観察）
まとめ 10分	振り返り ・他班の意見を聞き、自分たちの班の意見を振り返る。 ・ワークシートに他班の意見から気付いたこと等を記入する。 ・本時の活動について、自分の取組方、考えの変容を振り返り評価する。	・机を班から通常の形態に戻し、個人でしっかりと振り返りを行えるようにする。	【読む能力】 ・二つの文章を比較して読むことを通して、読みを深め、自分の考えを形成している。（自己評価シートの確認）

4 実践の様子

(1) 主体的、協働的な本文へのアプローチ

「これまでの課題」にも挙げたように、従来の古文の授業については、本文を板書し、文法事項を説明しながら現代語に訳し、訳を完成させていくことが主な学習となっていた。多くの生徒は、指名された誰かが教師の質問に答え、教師が「正解」を言うことを待って、ひたすらそれをノートに写すという作業を繰り返していた。その結果、「そう訳す根拠は何か」を考えたり、筆

者の考えに対して疑問を持ったりすることが少なく、知識の暗記に頼ってしまい、継続的な学習や知識の定着が十分にはできなかった。

そこで、本事例においては、授業で扱う古文作品の本文を上段に掲載し、下段に生徒が穴埋めをしながら現代語に訳していけるような自主学習のためのワークシートを準備した。ワークシートには、本文の内容について考えていくための発問も載せてある。ワークシートは単元の指導計画の第1時に『徒然草』の「花は盛りに」について、第4時に『土佐日記』の「門出」について配布した。ワークシートは事例の最後に掲載してある。

次に第2時、第5時において、協働的な学びを促すために、準備してきたワークシートをもとに、それぞれの学習内容を確認し合う時間を設けた。生徒は、3～4人程度の班になり、互いに学習してきた事柄を示しながら文法事項の確認や、その文法事項に準じた現代語訳の確認、修正等を行っていた。自主学習が十分でない生徒も、辞書を引いたり、文法のテキストをめくったりしながら作業することができていた。本文の内容について、深く考えるための手がかりとして掲載しておいた発問に対しても、話し合いながら、各自の考えをまとめていった。

図1では、生徒は辞書や文法書を手がかりに調べながら、ワークシートに記入している。理解の進んでいる生徒が、他の生徒の質問に答えたり、説明したりする様子も随所に見られ、教師が板書をしながら説明している際よりも、積極的に取り組んでいる姿が見られた。

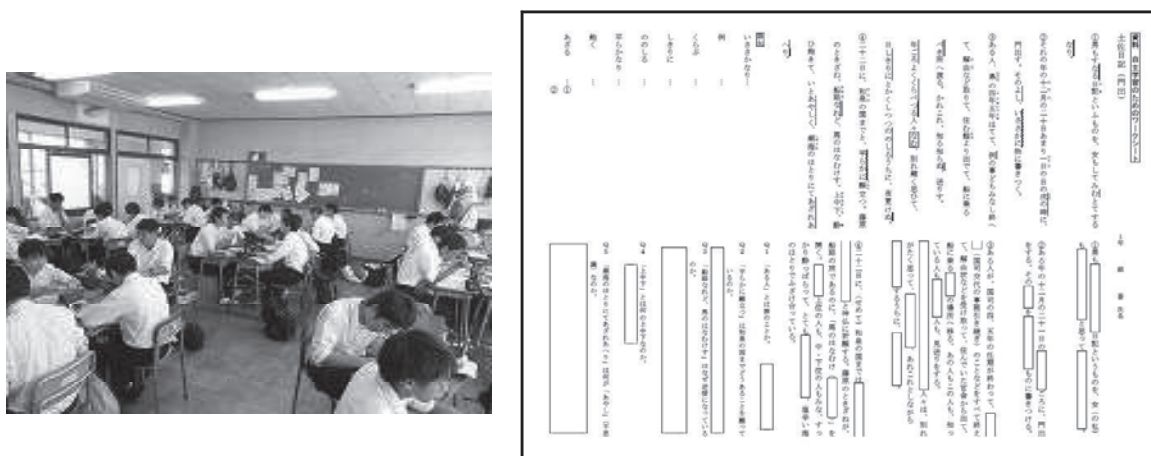


図1 活動の様子と自主学習のワークシート（資料）

(2) 実践1『徒然草』「花は盛りに」と『玉勝間』の比較

第2時で「花は盛りに」の解釈を確認し合ったことを踏まえて、第3時では、「花は盛りに」に見られる兼好法師の「自然観」や「風流」に対する考えを図式的にまとめさせ、生徒が、対立する概念などをイメージできるようにした。図式的に捉えられたことによって、生徒は「花は盛りに」が様々な事象に対して、「はっきりと形をもって見えるもの、または完成されたもの、ピークにあるもの」と「はっきりと見えないもの、不完全なもの、ピークを過ぎたもの」との対比で述べられていることに気付くことができた。見えないものに思いを馳せる兼好法師の風流心をよく理解することができた。

その上で、『玉勝間』において「花は盛りに」を評している箇所を抜粋したプリントを配布した。あえて現代語訳は載せず、これまでに学習してきた知識を生かして大意をつかむよう指示することで、生徒が粘り強く本文と向き合い、本居宣長の「花は盛りに」に対する考えを捉えられるようにした。最終的には、兼好法師と本居宣長の考えの比較を通して、生徒自身の「自然観」や「風流」に対する考えを形成できるようにした。

(3) 実践2（本時）『土佐日記』『門出』と『御堂関白記』の比較

ア 導入

「紀貫之はなぜ女性に仮託して『土佐日記』を書いたのか」という問いを提示し、まずは率直な生徒たちの考えを聞いた。

その後、女性に仮託した日記によって何を表現したかったのかを知るためには、男性によって記録されていた当時の日記を読み、比較する必要があることを投げかけた。男性が記録した日記の一つとして『御堂関白記』を紹介し、日記資料と『土佐日記』を比較しながら読み、相違点や類似点を付箋に記入する活動を設けた。『御堂関白記』は、目的地に向かって出発するという点で『土佐日記』との比較がしやすいと考え、金峰山へ参詣する箇所を取り上げ提示した。

イ 展開

はじめに個人での作業として、『御堂関白記』と『土佐日記』の相違点、類似点について二色の付箋に記入させた。全員一つずつは相違点と類似点を書くことを目標とし、簡条書きで簡潔にまとめるよう指示した。二つの文章を比べるに当たっては、生徒の実態を踏まえ、比較の観点を示さず、生徒自身の比較の観点で書かせてみた。個人作業の後、様々な意見を班で集約していく流れを考えて、本時の場合は、個人での作業はある程度多様な考えを出すことが望ましいと考えた。

自由に付箋に記入した後、KJ法を用いて、4～5人程度の班でA3の用紙に付箋を貼り出し、意見をまとめていく活動を行った。KJ法は、個人の意見を貼り出していく段階では、様々な意見を出し合い、付箋を貼り出す作業を行いながら、同時に似たような意見を重ねたり、カテゴリーごとに分類したりと、多くの意見を効率よく集約することができる。また、意見を集約していく中で、単に付箋に書かれた内容のみでまとめるのではなく、いくつかの意見を合わせたり、付箋に書かれた内容を話し合いながら具体的に言い換えたり、自分の言葉で捉え直したりすることができる。本時においては、主体的で協働的な本文へのアプローチから、意見の集約を通して深い学びが成立すると考え、KJ法を取り入れた。

各班ともに、付箋の貼り出し、集約を行った後で、相違点に着目し、「女性に仮託した日記で何を表現しようとしたのか」について検討を行い、班として意見を一つにまとめていた。

図2は、班活動の様子である。A3の用紙をメンバーの中央に置き、各自が付箋を貼り出している。全体に淡々とした様子ではあったが、貼り出しながら、同じ意見を重ねたり、付箋に書かれた内容について詳しい説明を求めたりしていた。貼り出した付箋を分類していく際には、A3の用紙に相違点、類似点で大きく左右に分けて付箋を貼り、分類したり、相違点、類似点を併せて分類し、上位のカテゴリーを設けたりなど、各班の思考の過程の異なりやメンバーの個性の一端が表れていた。



図2 班活動の様子

本時の展開の最後に、各班でまとめた意見をA4の用紙に太字のペンで書き、黒板に貼り出させた。簡潔に書くよう指示したものの、文字数が多く字が小さくて見えないものもあった。意見を書き出す用紙等の工夫や、まとめ方を指導する必要があった。全ての班に意見とその根拠を発表させる予定であったが、一つの班が発表した段階で、授業終了時刻となってしまった。

「なぜ女性に仮託して書かれたのか（女性に仮託した日記で何を表現しようとしたのか）」という問いに対し、KJ法を通して、各班によってA4の用紙に書き出された意見は以下のとお

りである。

- ・「人の日頃の心情」
- ・「日記を読んでいる人が具体的な情景をイメージしやすくするため」
- ・「今までの日記は男性が出来事を淡々と書いたものばかりだったので、女性目線で書かれた柔らかい表現をした日記が書きたかったから」
- ・「男中心の世の中を女性の目線から見ることで客観的に世間をとらえるため」
- ・「誰でも日記を書いていいということ」
- ・「当時は男性的であった『漢字』よりも、女性的な『かな』のほうが心情をあらわしやすく、この『かな』を利用して、紀貫之は心理描写をことこまかなものにした」
- ・「その時起こっていたことを書きとめ、残したかった」
- ・「男性的目線では気付けないことを女性的目線で書くことで、不思議に思うことを書きあらわした」

多少疑問のある解釈や表現が練られていないものもあるが、「心情を表現したかったのではないか」という大きな部分は押さえることができていたと考える。

5 更なる改善に向けて（成果と課題）

以下、実践の様子(1)～(3)ごとに、得られた成果と今後に向けての課題を挙げる。

(1) 主体的、協働的な本文へのアプローチ

ア 成果

ワークシートを使用した自主学習を前提とする授業については、生徒自らが調べて考える力を身に付けることができたと考える。辞書や文法書を繰り返し見ることによって、「気になったらすぐに調べる」姿勢が身に付いてきたと実感している。先日、課外の時間において、問題集の本文を品詞分解し、現代語に訳してみるという時間を設けた。その際、生徒の手元には詳細な品詞分解と現代語訳が掲載された解答冊子があり、長文でもあったため、解答冊子を見てもよいという指示を出した。しかしながら、多くの生徒が辞書や文法書を取り出し、自ら調べようとし、その上で、どうしても分からない点について質問してくる生徒も見られた。

本事例で配付したワークシートについては、あくまでも自転車の補助輪のようなものと考えており、今後は、ワークシートがなくても、各自がノートに予習してくることを目指していく。本事例を通して、自ら調べて考える習慣が定着していけば、生徒の予習への取組も随分変わってくると感じた。

イ 課題

ワークシートを事前に配付しても、授業時に忘れてしまう生徒や、何も書き込まないまま授業に臨む生徒が見られた。また、班で文法事項や現代語訳の確認を行っても、しっかりとワークシートに取り組んでいた生徒に頼り切りになってしまったケースも見られた。班のメンバーで事前の取組に差があると、活発に意見を交わし検討を進められる班と、各自が一通り意見を述べただけで終わってしまう班が出てしまい、学びの深まりに差が生まれてしまう。事前に文法事項を調べたり、現代語に訳したりしておくことは、地道な作業だが、文章をしっかりと読み取った上で、作者に対する自分の考えを深めたり、広げたりするには欠かせない作業である。主体的に考えるための基盤となる知識の定着の必要性を伝え、クラス全体の学習意欲の向上を図るような工夫を行っていきたい。

(2) 実践1『徒然草』『花は盛りに』と『玉勝間』の比較

ア 成果

「花は盛りに」を読み、兼好法師の「自然観」や「風流」心をよく理解したうえで、その批評文である江戸期の文章を読むという活動は生徒にとって興味深かったようである。『玉勝間』

の資料を提示すると、多くの生徒が辞書を引きながら、主体的に文章を読み取ろうとしていた。各自が読み取りを行った後、自分は本居宣長の意見に賛同するのか、兼好法師の風流心をよしとするのか、教師の指示がなくても意見を交わし合っている様子が見られた。生徒の主体的で協働的な本文へのアプローチが達成され、それを通じて深い学びへとつなげられたと思われる。また『玉勝間』は、兼好法師の風流心について批判的と言える立場で書かれた文章である。「花は盛りに」のみでは、兼好法師の風流心について、手放しに賞賛してしまいがちであるが、ここで批判的な文章を読み、それぞれの筆者の考えを比較することで、生徒にも批判的な視点を意識させることができたと感じている。相手の意見や考えに対して、しっかりとした根拠をもって対立するような意見を述べるという批評の姿勢は、今後の生活でも生かしていったほしいものである。

イ 課題

『玉勝間』の読み取りについて、資料に現代語訳を掲載しなかったことによって、生徒の主体的な学習が見られた。その一方で、生徒の習熟度によって、読み取りに時間がかかりすぎてしまう、十分な読み取りができない、また、考えを深めてほしい場面において深まりに差が出てしまうといった結果になった。学習の趣旨を考えれば、現代語訳をする作業はある程度簡略にし、筆者の考えを比較して検討する時間を十分に設定すべきであったと感じた。中には、初見の段階で大意をつかむという力をもっと身に付けさせたい生徒もいる。学習の趣旨と生徒の習熟度とのバランスを踏まえた時間の配分には難しさを感じた。さらに、今回は批判的な立場として書かれた『玉勝間』を生徒に資料として提示したが、正徹の『正徹物語』のような「花は盛りに」に対して賞賛的な立場で書かれた文章もある。批判的立場と賞賛的立場など複数の文章を比較して読んでいく取組も、様々な情報から生徒が自分の意見や立場を考えていく上で有効である。資料が複数になる場合は、古文の場合は現代語訳を提示するなど、資料の提示の仕方を工夫し、より活動の本質に近づくようにする必要があると考える。

(3) 実践2（本時）『土佐日記』『門出』と『御堂関白記』の比較

ア 成果

第一の成果として挙げられるのは、「門出」と『御堂関白記』を比較して読み気付いた点について付箋に書かせる際、個人作業の時間を設けたことにより、全員が自分の意見を何か一つは書くことができたことである。個人作業を行った上で、KJ法を取り入れたため、各自が意見を出し、それらの意見を集約していくまでの活動を活発に行うことができた。どうしても、習熟度の高い生徒に頼ってしまったり、強く主張する生徒の意見に引っ張られたりしてしまいがちだった班活動が、本事例においては、一人一人が自分の意見を提示し、意欲的に取り組めるものとなった。以下、ある班の付箋に書かれた内容等を記す。

(ア) 黄色の付箋（「門出」と『御堂関白記』で似ていると感じた点）に書かれた内容

- ・「平安時代に作られた」
- ・「日本の話」
- ・「船旅」
- ・「人々が騒いでいる」
- ・「行動が細かく記されている」
- ・「場所や時間の流れが正確に書いてある」
- ・「事実を書いている。感情があまり入っていない」

(イ) 青色の付箋（「門出」と『御堂関白記』で違っていると感じた点）に書かれた内容

- ・「土佐日記は仮名ありで、御堂関白記は仮名なし」
- ・「土佐日記は他者目線、御堂関白記は自分目線」
- ・「土佐日記は副詞や形容詞が多い。御堂関白記にはない」
- ・「土佐日記はゆるい感じで、御堂関白記はかたい感じ」

- ・「土佐日記は身分関係なく登場して、御堂関白記は貴族のみ登場」
- ・「土佐日記は言葉遊びがあるが、御堂関白記にはない」
- ・「土佐日記は自分の意見なども書いているが、御堂関白記は事実を書き連ねている」

(ウ) 貼り出した付箋を分類し、意見を集約していく段階

ある班では、貼り出された全ての付箋を「作品」「形式」「内容」のカテゴリーに振り分けていた。各カテゴリーに振り分けた上で、「形式」と「内容」のカテゴリーから違いを読み取り、結論へと班内で意見をまとめていた。最終的にこの班では、「なぜ女性に仮託して日記が書かれたのか（女性に仮託した日記で何を表現しようとしたのか）」という問いに対して、「仮名文字を使って、心情を豊かに表現したかった」という意見を発表していた。主体的で協働的な本文へのアプローチから、K J法を通して、様々な意見を踏まえ自分の考えを振り返って考え直したり、新たな視点を得たりなど深い学びが成立していたと考えられる。

本事例では、二つの文章の比較に留めたが、複数の文章を比較して読ませるには、適切な資料の選定が準備段階において大切である。生徒の読みの深まりにつながるような資料探しを意識して、様々な資料と向き合っていきたいと考える。

イ 課題

(ア) 導入の簡略化

本時の中心課題である「なぜ『土佐日記』は女性に仮託して書かれたのか」を、導入の段階で生徒に投げかけたが、説明に思いの外時間を取られてしまった。前時に次時の課題を伝えておき、本時の活動にスムーズに入れるようにしておいた方が良いと感じた。

(イ) 活動の「見通し」を意識するためのタイムスケジュールの提示

生徒たちは意欲的かつ活発に活動していたが、「次に何をするのか」、「最終的にどのような形で発表するのか」といった指示を各活動の間に行ってしまったため、指示が出てから考えて動くことになり、活動全体に時間がかかりすぎてしまった。そのため発表を一つの班しか行うことができず、また各班の意見も黒板に貼り出ただけで終了してしまった。導入の段階で、どのような活動を経て、最終的にどのような形で何を発表するのかというスケジュールを生徒に提示しておくことの必要性を感じた。スケジュールが提示されていれば、生徒も見通しをもって活動に取り組むことができ、班での話し合いをより深めながら着地点に向かえると感じた。今回の実践で最も改善すべき点の一つであると実感している。

(ウ) K J法の洗練

K J法については、一度授業に取り入れていたので、生徒たちは概ねスムーズに活動していたが、中には書いた付箋を一度に全て貼ってしまおうとしたり、同じことが書かれた付箋を貼ることができなかつたりと、生徒によって定着に差があり、付箋の貼り出し方にも差が出ていた。大きく班の活動を妨げるようなことにはならなかったが、一度行っているということに安心せず、やり方を事前に確認しておく必要があったと感じている。

(エ) 班編成

授業研究会において、一班5人では人数が多いのではという指摘があった。生徒一人一人がより主体的に活動を行うためには、3人程度の少人数グループも考えられる。班で取り組む問い（課題）の難易度等をよく検討し、いくつかの学習形態を試みていきたい。

(オ) 発表について

班でまとめた意見を発表する際には、班ごとに行うというやり方をとってしまいがちだが、本時のように各班の意見を黒板に貼り出しているような場合は、生徒に発表させなくてもよいと感じた。この点についても、授業研究会で意見をいただき、黒板に貼り出した意見を授業者がまとめていくという方法に取り組んでみたいと考える。本時のように、班で出された意見がある程度まとまった形で提示されていたこと、本時の目標が発表ではないことを踏ま

えると、授業者が集約する形でも十分であると感じた。授業の目標をしっかりと押さえ、簡略化すべきところは簡略化することで、班での活動から個人の振り返りへと、生徒の学びを個に返していくことができる。本時においては、個人の振り返りの時間を取れなかった点も改善すべき点の一つである。

今回、この実践を通して、従来の古文の授業の在り方を僅かながら見直すことができたのではないかと考える。複数の文章や資料を比較して読み考えさせるという活動は、以前から取り組んできたことであり、今後も授業を作っていく際に中心に据えたい活動である。本時の実践を通して、様々な指摘をいただき、また授業技術の基本的な部分での課題も見つかった。これらを踏まえ、生徒の深い学びへとつながるよう、さらなる授業改善を行っていきたい。

〔参考文献等〕

- ・大滝一登 幸田国広 編著『変わる！高校国語の新しい理論と実践』（大修館書店）
- ・繁田信一 編『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 御堂関白記 藤原道長の日記』（角川ソフィア文庫）

資料 自主学習のためのワークシート

土佐日記（門出）

1 年 組 番 氏 名

①男もにせ日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

②その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌ひつの時に、門出す。そのよし、いさぞかに物に書きつく。

③ある人、四年の四年五年はてて、例の事どもみなし終て、解由きゆうなど取りて、住む館かんより出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。
年としるよくくらくする人々なむ、別れ難く思ひて、日しきりにとかくしつづののしるうちに、夜更けぬ。

④二十二日に、和泉わいの国までと、平らかに願立つ。藤原のときぎね、船路ふねぢなれど、馬のはなむけうまのはなむけ。上中下、酔よひ飽きて、いとあやしく、潮海しほみのほとりにてあざれあぐり。

語句

いさぞかなり…

例 …

くらく …

しきりに …

ののしる …

平らかなり …

飽く …

あざる …①
②

①男も 日記というものを、女（の私）も と思つて 。

②ある年の十二月の二十一日の ころに、門出をする。その を ものに書きつける。

③ある人が、国司の四、五年の任期が終わつて、 （国司交代の事務引き継ぎ）のことなどをすべて終えて、解由状などを受け取つて、住んでいた官舎から出て、船に乗る の場所へ移る。あの人もこの人も、知っている人も 人も、見送りをする。
人々は、別れがたく思つて、 、あれこれとしながら するうちに、 。

④二十二日に、（せめて）和泉の国までは と神仏に祈願する。藤原のときぎねが、船路の旅であるのに、「馬のはなむけ（ ）」を開く。 上位の人も、中・下位の人もみな、すっかり酔っぱらつて、とても 、塩辛い海のほとりでぶち合っている。

Q 1 「ある人」とは誰のことか。

Q 2 「平らかに願立つ」は和泉の国までどうあることを願っているのか。

Q 3 「船路なれど、馬のはなむけす」はなぜ逆接になっているのか。

Q 4 「上中下」とは何の上中下なのか。

Q 5 「潮海のほとりにてあざれあぐり」は何が「あやし」（不思議）なのか。

事例 2 書くことの充実を図る授業例 ～ 「自己との対話」に向けて ～	
単元名	1 評論「無彩の色」 2 短歌 3 自己の体験を振り返る
これまでの課題	「読むこと」の力を育成する授業に偏りがちで、「書くこと」の単元が単発の取組になってしまい、単元間の連携がとれていないことが多かった。また、依然として生徒の「書くこと」への苦手意識が強く、苦手意識を払拭できないまま授業が行われるため、「書くこと」の力を向上させることが難しいという課題もあった。生徒の一般的な言葉に対する語彙力が低下していることも、「書くこと」の力の育成の妨げになっている。
授業改善のポイント	「言葉で感情を表現する」には、さまざまな方法があることを伝え、生徒が「書くこと」に主体的に取り組める活動を取り入れる。本文から読み取ったことを手がかりに、「書く」活動を段階的に取り入れ、複数の教材で一つの単元を組み立てることで、「書くこと」を発展・深化させる。

1 指導観

(1) 本単元について（教材観）

本校では、「書くこと」に対して苦手意識をもった生徒が多い。普段の生活においても、SNSなどの短い文だけでコミュニケーションをとる姿が見られる。新聞はもとより、教科書の文章も生徒にとってはかなり難解であるといえる。しかし、実践1の文章のテーマである「色」については生徒たちにとって身近なものであり、比較的容易に表現活動を行うことができると考えた。また、実践2では「短歌」という短い文の中に込められた作者の心情を深く読み味わうことで、さまざまな形で深く感情を表現できることを実感させることができる。さらに、実践3では実践1、2を踏まえて、自己の感情を振り返り、詳しく表現することを意識させることを通して、「書くこと」の力の育成につなげたい。

(2) 生徒の実態（生徒観）

近年、生徒を取り巻く環境の変化から、コミュニケーション能力の低下が問題視されている。本校の生徒においても、極めて狭い言語範囲の中で過ごしている者が多い。そのため、誤解が生じたり、意思疎通が成立しないときに責任を転嫁したりする場面が見られる。また、複雑な感情表現ができない、そもそも感情表現をしないという生徒も多い。簡単な感情表現しか行わないため、結果として自分の感情をコントロールできない、自分の感情を客観視できないといった生徒が増えているように感じる。

本校は毎年8割を超える生徒が就職を希望し、卒業後すぐに社会へと旅立つ。このような状況を考えると、国語科においては、まずは言葉でコミュニケーションをとることや語彙力を向上させることの重要性を自覚させることが大切であると考えます。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

本校においては、生徒一人一人に社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を

育み、キャリア発達を促すキャリア教育の視点が重要である。中教審答申（平成28年12月）に示された育成を目指す資質・能力の三つの柱のうち、次に示す③を、特に重視すべきと考えた。

③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等の涵養）」

- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。一人一人が幸福な人生を自ら創り出していくためには、情意面や態度面について、自己の感情や行動を統制する力や、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等を育むことが求められる。こうした力は、将来における社会的な不適応を予防し保護要因を高め、社会を生き抜く力につながるという観点からも重要である。

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』（平成28年12月）

※波線は筆者が施したものである。

以上のような点から、本実践では「書くこと」について、教師が様々な角度から捉え、意識的に学習させたいと考えた。生徒の他者理解、自己理解へと発展させ、キャリア発達を促すプロセスを探りたい。

2 単元の指導計画及び評価計画

○単元の評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
・自分の考えや感情を整理し、工夫して表現しようとしている。	・語句や表現を工夫して、自分の考えや感情を適切に表現している。	・文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表現技法などを理解している。

次	時	学 習 内 容	評価の観点			評 価 規 準	評価方法
			関	書	知		
1	1 ～ 3	「無彩の色」本文の解釈 ・文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解する。 ・筆者の主張を理解する。			○	・文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解している。	ワークシートの点検
2	4 (実践1)	色の名前を創作する ・自分の考える「色」の名前を創作する。 ・創作した色の名前について、説明文を書く。	○			・自分の考えや感情を整理し、工夫して表現しようとしている。	行動の観察
		・グループで自分の考えた色について発表し合う。 ・グループの代表者がクラス全体に発表をする。		○		・自分の考えた色について語句や表現を工夫して表現している。	自己評価シートの確認
3	5 ～	短歌の解釈 ・短歌の形式、表現技法について			○	・短歌の表現技法について	ワークシ

	6	理解する。 ・短歌に詠まれた作者（正岡子規など）の心情について理解する。				て理解している。	ートの点検
4	7 (実践2)	短歌の創作 ・現代短歌（『ドラえもん短歌』）を鑑賞する。 ・自分の体験を短歌にする。		○		・短歌に用いる語句や表現を工夫して、自分の感情を適切に表現している。	ワークシートの点検
5	8 (実践3)	自分の感情を詳しく書く ・自分の過去の体験を振り返る。 ・様々な視点から、自分の感情を詳しく書く。	○			・自分の過去の体験に対する感情を整理し、工夫して表現しようとしている。	行動の観察
				○		・語句や表現を工夫して、自分の感情を適切に表現している。	ワークシートの点検

3 実践の様子

(1) 実践1（8時間中の4時間目）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（方法）
展開1	「色」の名前の創作 ①自分の考える「色」の名前を創作する。 ②創作した「色」がどのようなものなのか、説明する文章を書く。	・印象に残っている経験などについて、色の名前を創作させる。 ・辞書を使って漢字を見つける方法を紹介し、辞書を引くよう促す。 ・創作した色について、具体的な説明を書かせる。	【関・意・態】 ・自分の考えや感情を整理し、工夫して表現しようとしている。 （行動の観察）
展開2	発表 ③自分の創作した「色」について、グループで発表する。	・ワークシートをもとに、創作した色の説明をさせる。	
展開3	代表者による発表 ④各グループの代表者が全体に発表する。		【書く能力】 ・自分の考えた色について語句や表現を工夫して表現している。 （自己評価シートの確認）

教科書の本文にある「利休鼠」という灰色を取り上げ、生徒に「色の名前」を創作させた。すべて漢字で名付けること。5文字以上を目指すこと。その色の説明文を書くこと。以上の点を踏まえ、生徒に自由に創作させた。図1に生徒が記入したワークシートを掲載した。以下が生徒の作った「色の名前」とその説明である。

- ・釣疑似餌虹色…………釣りで使うルアーは、細かいところまで様々な色が使われていて、それが水に沈むと虹色に見える。日本の技術力の高さを感じた。
- ・高校入試勉強色…………中学3年の冬休み、高校入試に向けて死ぬ気で勉強した時のノート。ページいっぱい過去問を解き、全体的に灰色っぽくなったノートの色。合格が決まった日にこのノートを見返して、自分の頑張りに感動した。
- ・蹴拳闘戦高速紫色…キックボクシングの戦いは、赤コーナーと青コーナーに分かれて、それぞれグローブの色も赤と青である。強い選手同士が本気で戦うと、パンチが強く、速く、赤色と青色が混じり合って紫に見えることがあった。
- ・大人肺黒色…………禁煙講話で見た。煙草を吸っている大人の肺の色。この色は多くの黒色の中で一番残酷な色だ。
- ・野球試合後制服色…野球の試合で、一生懸命頑張った後の、ユニホームが泥だらけで、汚れた土色を表現しました。
- ・引越夜空色…………幼い頃から見てきた東京の夜空。周りの建物の明かりで少ししか星が見えない。中学2年の時栃木に引っ越してきた日の夜、少し寂しくなり、ふと夜空を見上げた。そこには今までに見たこともないほどの星が瞬いていた。僕の寂しさを埋めてくれた夜空の色。

生徒は辞書を活用しながら、悩みながらも、自分の色の名前を作ることができた。グループでの発表も楽しそうに説明し合い、活発に発言する姿が見られた。グループでの交流を通して、生徒は以下のような感想を自己評価シートに記入していた。

- ・一人一人違う色があって、その色でいろいろな気持ちが表現されていたのすごかった。
- ・自分とは違う感じ方や考え方があって、聞いていて確かにあるなと思った。
- ・班のみんなは上手く説明できていて素晴らしいと思った。自分ももっと上手く説明できるようになりたい。
- ・色に込められた思いや考えがすごく伝わってきた。
- ・言葉一つでいろいろな想像ができることに気がついた。
- ・色を漢字で表すのは面白いし、気持ちが伝わるんだなと思った。

以上の生徒のコメントにあるように、言葉で感情を表す方法は一つではないこと、様々な表現方法で感情を伝えることができることを示すことができた。

The figure shows two examples of student worksheets. Each worksheet is divided into several sections:

- 色の名前 (Color Name):** A section for writing the color name in kanji.
- 色の説明 (Color Explanation):** A section for writing a description of the color.
- 色の説明 (Color Description):** A section for writing a description of the color.
- 色の説明 (Color Description):** A section for writing a description of the color.

The left worksheet shows a student's work for '釣疑似餌虹色' (Fishing Lure Rainbow Color) and '蹴拳闘戦高速紫色' (Kickboxing High-Speed Purple). The right worksheet shows a student's work for '引越夜空色' (Moving Night Sky Color) and '大人肺黒色' (Adult Lung Black Color).

図1 ワークシート（資料1）

(2) 実践2（8時間中の7時間目）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（方法）
展開1	俵万智の短歌の学習 ①作者の心情を捉える。 ②「この味が」の短歌の工夫されている点を話し合う。	・ワークシートを用いて、作者の心情を捉えさせる。 ・グループで工夫されている点を話し合わせる。	
展開2	『ドラえもん短歌』の鑑賞 ③グループで感想を伝える。 ④一番気に入った作品を決め、発表し合う。	・ワークシートに載せられた短歌を見ながら、自由な発言を促す。	
展開3	短歌の創作	・こだわりの言葉を決めさせ、表現を工夫させる。	【書く能力】 ・短歌に用いる語句や表現を工夫して、自分の感情を適切に表現している。 （ワークシートの点検）

短歌の読解の授業を踏まえて、短歌の創作活動を行った。授業では、正岡子規、斎藤茂吉から、『サラダ記念日』、『ドラえもん短歌』まで幅広く取り扱った。毎時、グループワークを取り入れて、生徒同士の交流を通して短歌の読みを深めた。短歌の読解において、生徒たちの反応は思った以上によく、創作へ期待がもてた。「読むこと」を深めた上で「書くこと」につなげる重要性を感じた。以下は短歌読解後の生徒の感想である。

- ・一つ一つの言葉の意味を読み解くと、作者が詠んだ時の状況や心境がよく分かってなるほどと思った。短歌に興味を持った。
- ・短歌をここまで深く考えたことがなかったけど、一文字一文字を掘り下げて考えていくと、作者の状況とか考えが伝わってくるんだと思った。
- ・作者の思いがたった31音で表現されていることに感動した。
- ・言葉の力は強い。
- ・「いのち」という言葉一言でこんなにも変わるんだなと驚いた。
- ・斎藤茂吉の他の短歌も読みたくなった。
- ・短歌は思いを形にできる方法の一つだと思った。
- ・最初は内容が分からなかったけど、分かった時にすごいと思った。心が震えた。

また、作者の思いに自分の心を重ねた生徒のコメントも多くあった。

- ・自分も父や母が死んだら叫ぶことしかできないだろう。
- ・16年生きてきて、短歌で泣いたのは初めてです。「母よ」の言葉に込められた作者の思いを聞いているうちに、手とか口が震えて目にどんどん涙がたまっていきました。本当に感動しました。

ア 生徒の作品

- ・冬の朝目覚まし鳴って起きようと負ける自分と頑張る自分

- ・君がいるただそれだけで輝いて話してるだけそれだけなのに
- ・何気ないその一言でいつだって喜ぶ自分悲しむ自分
- ・何気ないいつもの日常思い出し合唱の最中視界揺らぐ
- ・夏休み終わってすぐに新学期なぜだかみんな成長している
- ・なぜだろう短歌を作る最中に脳裏によぎる今日のごはん
- ・入学し周りはみんな知らぬ顔気付けば今は馴染み顔
- ・授業中睡魔におそわれ四苦八苦頬をつねって己と戦
- ・君のこと見ていてだけで胸が痛いけどなんだか嫌じゃない
- ・復興で蒸気機関車鬼怒川に向かう姿は動物のよう

イ ある生徒の作品

- ・最後の夜父とかわした約束に手を握りしめ去っていく父

この生徒は普段から主体的に国語の授業に取り組んでいる。そのなかでも、今回の短歌の授業には、ひときわ熱心に取り組んでいた。できあがった作品は、短歌の技術としては未熟なものだが、この短歌には、生命に向き合う真剣さが表現されている。父との別れについて、時間いっぱい指を折りながら懸命に歌を作る生徒の姿を見て、胸を打たれた。生徒は授業後、「父の死後、初めてここまで死に向かい合うことができた。」と語ってくれた。

短歌の創作では、多くの生徒が真剣に短歌を推敲していた。自分の思いを何とか31文字で表現しようと、粘り強く取り組む姿が見られた。

(3) 実践3 (8時間中の8時間目)

	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
展開1	自分の感情が大きく揺れた体験Ⅰ ①ワークシートの質問事項に従って、自分の感情が大きく揺れた体験を捉える。	・大きく感情が揺れた体験を振り返らせ、その時の感情を思い出させる。 ・今の時点でその体験を捉え直させ、過去と今と、自分の感情の変化に注目させる。	【関・意・態】 ・自分の過去の体験に対する感情を整理し、工夫して表現しようとしている。 (行動の観察)
展開2	自分の感情が大きく揺れた体験Ⅱ ②ワークシートに書いた内容を踏まえて、自分の感情について、更に詳しい文章にする。	・ワークシートをもとに、一つの文章としてまとめるよう指示する。 ・書き終えた生徒には、誤字脱字の確認、表現の工夫をするよう指示する。 ・言葉かけを最小限にし、書くことに集中させる。	【書く能力】 ・語句や表現を工夫して、自分の感情を適切に表現している。 (ワークシートの点検)
展開3	書いた文章を振り返る	・本時の活動の意味について説明し、各自で書いた文章を振り返らせる。	

本実践は、実践1、2を踏まえ、自己の感情や行動を統制する力を育むため、自己との対話を深める活動である。生徒自身の「大きく感情を揺さぶられた体験」を思い出させ、その体験を詳しく書かせる。また、現在振り返ってみると、どのように感じるのかも文章にするよう指示した。本時では、生徒にはできるだけ負の感情に向かい合うよう伝えた。自らの痛みを認識できなければ、他者の痛みを推し量ることも難しいことに生徒が気付く、実生活におけるコミュニケーションに生かして欲しいと考えたためである。高校卒業後、すぐに社会に出て働く生徒が多くいる中で、その生徒が様々な人たちと円滑な人間関係を築いていくための準備段階として、このような活動を考えた。しかしながら、生徒の置かれた環境や成長過程、心の状態には十分に配慮して授業を行う必要がある。本時においては、生徒が最終的に書き上げた文章については、話し合ったり、発表し合ったりするものではないこと、あくまでも生徒と授業者との間でやり取りされる文章であることを約束した上で実践した。

実際に感情を文章化するに当たっては、初めから長文を書くのではなく、五つの質問項目に掲載したワークシート(図2・資料2)を準備した。生徒は、それらの質問項目に答えてから、その答えをつないで、さらに詳しく説明していく文章を書くという順序で書く活動を行った。

ワークシートの質問項目は以下のとおり。

- ①いつ、どのような体験だった？
- ②その時どのような気持ちだった？
- ③その時の気持ちを何かにたとえてみよう。
- ④どうしてそんな気持ちになったのか理由を考えてみよう。
- ⑤今、振り返ってみるとどう思う？

図2 ワークシート(資料2)

今回のねらいは、「自己との対話」を深めることで、過去の自分と向き合い、客観的に自己と対峙することである。多くの生徒が、冷静に自分の過去と向き合うことができていた。

以下は質問項目③、その当時の感情を何かにたとえた生徒の文である。

- ・自分の体の一部分が消えて無くなったような気持ちでした。
- ・その時の気持ちを何かにたとえたとしたら、リビングの家具が少しずつ無くなって行って、最後には何もないリビングで一人だけになったような気持ちでした。
- ・外国語が全くしゃべれないのに、その外国へ連れて行かれたような気持ちでした。
- ・クリスマスの次の日に、まだずっと見ていたかったクリスマスツリーを片付けなければならない、名残惜しい気持ちに似ている。

以下は、質問項目⑤、現在から振り返った感情を記した生徒の文である。

- ・あの時もっと冷静に話を聞いて、自分の気持ちも話せばよかった。
- ・今振り返ってみると、今では思い出すことも少なくなってきたのも、悲しみやつらさが少なくなってきたのも、今の高校生活が楽しいからだ気がつきました。
- ・この出来事から、大切な人はいなくなってからその人の大切さがわかるのだと心から思いました。
- ・でも、今振り返ると、あの挫折があったから今の自分があるのだと思います。あの経験から「強く生きる」ことを学びました。
- ・あの体験から、当たり前のがすごく大切に感じる事ができている。
- ・もし同じことがまた起こったら、あの日と同じ感情を持つと思います。ですが、あの日の私よりも今の私のほうが家族の力になれると思うし、もっと上手に対応できると思います。
- ・今思うと、僕も同罪だった。自分の意見をきちんと伝えなければならなかったと思った。
- ・あの時努力して達成できた体験が今でも自分の支えになっている。無駄ではなかったと今では思える。

次に、生徒はワークシートに記入した内容をもとに、感情をできるだけ詳しく書く活動に取り組んだ。ワークシートの質問項目を順番に書いていくことで、どの生徒もスムーズに文章を組み立てることができていた。また、普段はなかなか授業に集中できない生徒が、本時においては、授業中一度も言葉を発することなく集中していたり、書くことを苦手としていた生徒が、一生懸命辞書を引きながら言葉を紡いでいたりする姿が見られた。提出されたプリントには、過去の体験にしっかりと向き合いながら、その時の感情を振り返り、今どのように考えるかが生徒自身の言葉で綴られていた。更に、過去の自分を振り返ることで、自らの成長を実感し自信をもったためか、本時を実施した後、学習へ向かう姿勢が改善されたり、学習意欲が向上したりした生徒が見られた。

しかし、自分の感情を上手く表現できたかどうかを生徒に聞いたところ、多くの生徒が「気持ちと言葉が合っていない」「完全には伝えられない」という反応をしていた。自分の感情をより正確に伝えるためには、語彙力も必要であることを実感したようである。

(4) その他の実践

その他の実践として、生徒の語彙力向上のための取組を、帯単元として実施した。毎時10分程度の取組である。その例を紹介する。

ア 語彙力アッププリント① 【確実さ】のものさし

- ・絶対に ・必ず ・確実に ・間違いなく
- ・九分九厘 ・十中八九
- ・きっと ・おそらく ・たぶん
- ・ひょっとすると
- ・ちょっとやそつとでは

イ 語彙力アッププリント② 【頻度】のものさし

- ・つねに ・たえず ・いつも
- ・しじゅう ・しょっちゅう
- ・よく ・たびたび ・しばしば
- ・時折 ・時々
- ・たまに ・まれに

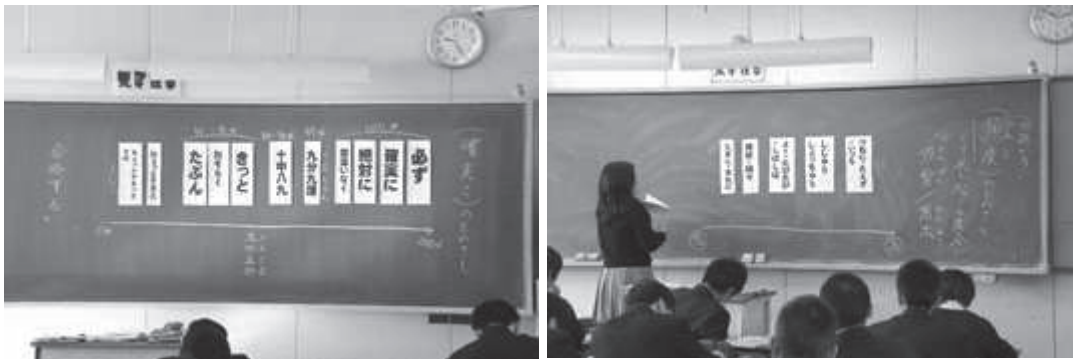


図3 帯单元実施の様子

それぞれの語句のカードを作成し、黒板に貼り、生徒に100%～0%、高～低などの順番を考えさせながら、並べ替えをさせる。ヒントとして、例文を提示して考えさせた。

授業開始時の10分ほどの時間であるが、生徒たちは周りとは相談しながら、真剣にカードの順番を考えていた。就職活動のエントリーシートなどを例に挙げながら説明すると、生徒たちも語彙力向上の重要性を理解していた。

5 更なる改善に向けて (成果と課題)

(1) 実践1

ア 成果

生徒にとって身近なテーマであったことで、色の名前を創作することに主体的に取り組めたようであった。多くの生徒が自主的に辞書を活用できていたのも成果の一つに挙げられる。

また、友人の気持ちや考えを色の表現から理解できており、感情の表現方法の多様性を理解させることができた。

イ 課題

色の創作後に、もう一度教科書の内容に戻り、日本の伝統色を紹介するなどの活動へ展開すると、より深い学びにつながったのではないかと考える。より「書くこと」と「読むこと」をつなげる授業展開を考え実践したい。

(2) 実践2

ア 成果

「読むこと」の深まりと「書くこと」へのつながりの重要性を改めて認識できた。31文字という限られた言葉でも深い心情表現ができることをしっかりと理解した上で、短歌の創作を行ったことで、生徒たちは粘り強く推敲する時間をもつことができた。また、作者の思いに自分の心を重ね、自分のこととして捉えた生徒も多くみられた。

イ 課題

今回は、生徒が創作した短歌の優秀作品を匿名でプリントにし、各自で鑑賞するに留めたが、お互いの短歌を鑑賞し合い、どのような点が良かったかなどを話し合わせることで、対話的な学びにつながると感じた。また、そのような対話的な学びによって、短歌の創作における技術の向上が図れたのではないかと考える。

(3) 実践3

ア 成果

ワークシートの質問項目への答えをつなげて順番に文章にしていくことによって、生徒は、かなり長い文章を書くことができた。多くの生徒が「自己との対話」を通して、過去に大きく感情が揺さぶられた体験を、現在では前向きに捉え、それを文章にし表現することができた。

本実践を通して、自分の感情を言葉で表現することの重要性を理解させることができた。

また、総合的な学習の時間の「自分を見つめる」単元とのつながりも意識して授業を設定した。こうしたカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた単元の展開は、今後も「書くこと」の授業において、更に様々に実践できるように感じた。言語活動そのものを指導する国語という教科の役割を改めて認識できた。

イ 課題

いわゆる学力の高い生徒の中に、当たり障りのない作文を書いた生徒が数人いた。文章がすらすら書けることで、かえって「自己との対話」が表面的なものに留まり、葛藤による思考の深まりが見られなかった。

(4) その他の実践

ア 成果

厚紙で作成した語彙カードを使用することで、生徒の注目を自然に集めることができた。取り上げた語句を授業やホームルームなどで意識的に使用することで定着を図った。中には、あえて学んだ語句を使い質問をする生徒なども増え、生徒の言葉に対する意識も向上してきたことがうかがえた。

イ 課題

言葉で理解したり表現したりしながら、自分の思いや考えを広げ深めていくうえで、語彙を豊かにすることは最重要課題である。生徒の語彙力向上のために、どのような語彙をどのような方法で増やし、使用語彙として獲得させていくのか、今後さらに工夫が必要である。本校の生徒たちの実態に即した語彙力の向上を意識して実践していきたい。

本実践を展開している際、あるクラスの生徒が「先生、これを書いたら、どんなメリットがあるんですか」と質問してきた。自己の感情と向き合うこと、それを文章にすることが、君たち（生徒たち）の「より良く生きる」ことにつながることを説明した。生徒はかなり真剣に聴いてくれ、正直驚いた。今回の取組を通して、生徒は自己表現をしたくないのではなく、これまで機会がなかった、あるいは、どうしたらいいのかやり方がわからなかったのだと気付かされた。改めて、生徒自身が目的や必要性を意識して取り組める授業を実践しなければならないと感じた。

本実践において、生徒たちは私の想定を超える文章を書いてくれた。この取組をさらなるキャリア発達につなげるためにも、3年間を通じた「書くこと」の指導を充実させる必要がある。どのように発展・深化させるのか、またどのようにすればより生徒たちが主体的に取り組めるのか、私たち教師の研鑽が必要である。その一つの例として、「ポートフォリオ型の振り返りシート」を現在考えている。「ポートフォリオ型の振り返りシート」を用いることで、生徒たちが自身で書いた内容を1年後、3年後に振り返り、何か向上した、変化した部分を実感できるのではないかと考える。今後も、生徒一人一人の将来が「よりよい生活や人間関係を自主的に形成」できることを目指し、「書くこと」の充実を図る授業を実践したい。

〔参考文献等〕

- ・ 杵野浩一編『ドラえもん短歌』（小学館文庫）
- ・ 『ベネッセ表現読解国語辞典』（ベネッセコーポレーション）

資料 1 自分の色を表現するためのワークシート

「無彩の色」 ワークシート②

く自分の色を表現してみようー！

() 科 一年 () 組 () 番 名前 ()

●あなたの「色」を漢字で名付けてみようー！

(例)・「運動会空色」

小学校最後の運動会。入場行進の時にふと見上げた空の吸い込まれそうな深い青。なんだか感動して、いろいろな気持ちがこみ上げてくる。自分でも説明できない思いで胸がいっぱいになり、涙が出そうになった。

・「恋人頬桃色」

初めての彼女。彼女の前だと、僕はドキドキして何もしゃべれなくなった。どうしたら良いのか焦る僕。ふと彼女を見ると、彼女も恥ずかしそうに頬をピンク色に染めてうつむいていた。

○色の名前

(ふりがな)

○色の説明

○友達の色

○自己評価

(1) 自分の「色」を表現することができた。

A B C D

(2) 友達に聞き取りやすく発表できた。

A B C D

(3) 友達の発表をよく聞くことができた。

A B C D

○ひとことコメント (授業の感想、気がついたこと、わからなかったことなど)

--

自分の感情が大きく揺れた体験を書いてみよう

() 科 一年 () 組 () 番 名前 ()

- ◎自分の気持ちが大きく揺れた体験を思い出してください
- すこく悲しかったこと。すこくつらかったこと。
- すこく嬉しかったこと。すこく楽しかったこと。
- すこく悔しかったこと。すこく腹が立ったこと。

①いつ、どんな体験だった？

②その時どんな気持ちだった？（くわしく書く。）

③その時の気持ちを何かにたとえてみよう。

④どうしてそんな気持ちになったのか理由を考えてみよう。

⑤今、振り返ってみるとどう思う？（くわしく書く。）

事例3 主体的な対話活動の実践 ～ 効果的な説明から質問へ ～	
単元名	文章表現の基礎 効果的な説明の方法
これまでの課題	日常生活における生徒同士の会話を聞いてみると、単語一語のやりとりで満足している場面が多く見られる。また他人の話を聞く際にも、相手が伝えたいことは何か、要点は何かを考えることなく、聞き流していることが多くあると感じる。 授業においても、生徒が場や目的、相手を意識することなく発言をしてしまったり、ノートにメモをとることができず、ただ板書事項を写したりしている姿が多く見られた。授業がその場限りのものになりがちで、生徒の日常生活に生かされていないことを感じる。
授業改善のポイント	相手が伝えたいことは何か、注意深く聞き取り、要点をまとめていく練習を繰り返した。また、相手が伝えたいことを正しく聞き取る必要性について考えさせた上で、自分が相手に何かを伝える際に、どのような言葉を用い、どのような順序で話すと効果的なのかを考えさせる活動を行った。これらの取組をもとに、自分にとって必要な情報を得るための質問を考えさせる、クイズ形式の活動を取り入れた。生徒にとって興味・関心の高い話題や教材を選定し、生徒が主体的に授業に向かうとともに、授業と日常生活とのつながりを感じさせることを意識して授業を行った。

1 指導観

(1) 本単元について（教材観）

文章にはさまざまな情報が含まれており、その中から自分にとって必要な情報を取り出していく力は、日常生活において必要な力である。漠然と話を聞くのではなく、要点は何か、自分にとって必要な情報は何かを意識して聞く場面を設けることで、生徒の聞く姿勢、態度を改善させられると考えた。また、説明をする場合も、目的に応じた説明事項の配列によって、より相手に伝わりやすくなることを学ぶことで、自分たちが何かを伝える際にも役立てられると考える。国語表現という科目の特性を生かし、生徒の身近な話題等を取り上げることで、授業と日常生活のつながりも感じさせていきたい。

(2) 生徒の実態（生徒観）

クラスの全員が運動部に所属しているという状況にあり、その部活動において、日頃から監督やコーチから技術的な指導だけでなく、大会日程等様々な説明を受ける機会が多い。その際は、多くの場合が説明を聞き取って理解し、大切な情報を記憶しておかなければならない。また、後輩に指導をしたり、対外試合等において他校の生徒と共に活動したりすることも多く経験している。人前に出たり、他者と活動したりすることに抵抗を感じる生徒が少なく、授業でも対話や発表といった活動に積極的に取り組むことができる。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

生徒の多くは、高校卒業後すぐに就職をし、社会に出て働く。そのため、本単元では、目的や場に応じて、相手を意識して話したり、聞き手として必要なことを間違いなく、過不足なく聞き取ったりする力を育成する。また、生徒が日常での言葉遣いや話し方等を振り返り改善に生かす

ことで、実生活に役立つ表現の仕方を身に付けさせたいと考える。

2 単元の指導計画及び評価計画

○単元の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	知識・理解
・自分が必要とする情報を得るために適切な質問をしようとしている。	①目的や場に応じて、相手を意識して分かりやすく説明している。 ②話し手が説明している内容を的確に捉えるために、メモを取りながら聞き取っている。	・話したり、聞いたりすることから効果的な表現方法について理解している。

次	時	学 習 内 容	評価の観点			評 価 規 準	評価方法
			関	話・聞	知		
1	1	効果的な説明の方法について理解する。 ・記書きの形式を理解し、伝わりやすい言葉の順序等を考える。			○	・効果的な表現方法について理解している。	ワークシートの点検
2 (本時)	2	オリンピックの競技について説明する。 ・グループで、専門用語等を用いずに、担当競技を説明する方法を考える。 ・各グループの説明を聞き、何の競技かを考える。		①		①目的や場に応じて、説明の順序等を検討し、分かりやすく説明している。	ワークシートの点検
3	3 ～ 4	ことわざでクイズをしよう。 ・グループでことわざについて、意味や用法、誤用等をパソコンを用いて調べる。 ・調べ学習から得た知識をもとに、グループ同士で問題を出し合う。	○			・問題に答えるため、必要な情報を得るために適切な質問をしようとしている。	行動の観察
				②		②内容を的確に捉えるために、メモを取りながら聞き取っている。	ワークシートの点検

3 本時の展開（4時間中の2時間目）

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準（方法）
導入 5分	前時の学習内容の確認 本時の目標、活動等の確認		

展開 1 15 分	- グループに分かれて、グループごとに説明を担当する競技を確認する。 - 担当する競技について、どのように説明するかを考え完成させる。	- どのグループがどんな競技を担当するか、どんな競技が振り分けられているかは伏せておく。 - 担当競技に関する専門用語、カタカナ語等を使用しないで説明することを徹底する。 - 机間指導を行い、滞っているグループへの支援をする。また、専門用語等を使用していないかどうかを確認する。	【話す・聞く能力】 ①目的や場に応じて、説明の順序等を検討し、わかりやすく説明している。 （ワークシートの点検）
展開 2 25 分	- グループごとに、考えた説明を発表する。 - 発表を聞いている班は、メモを取りながら、どのような競技かを考える。	- ワークシートにメモを取ることを指示する。 - 自分のグループで工夫した点と、他のグループの工夫された点を比較しながら聞くよう伝える。	
まとめ 5 分	本時の学習を振り返る。特に説明が上手だと感じたグループについて、どのような点が工夫されていたか考え、まとめる。		

4 実践の様子

(1) 効果的な説明の方法について理解する

部活動で、練習試合についての連絡をする場面設定をした。連絡文の書き方について、記書きの文書の方法を学び、表記上の注意を確認した。その後、生徒間では主にメールを利用して練習試合の連絡等がなされていることを踏まえ、どのようなメールが送られているかを確認し、内容について検討を行った。実際にどのような連絡が届いているかと、どのような項目が入っているべきかとを話し合う中で、生徒たちからは、「場所」、「実施日」、「時間」、「持ち物」等の項目が挙げられた。しかし、どのように配列するかは特に何も考えていない様子であったため、記書きの文書を参考に、どのように配列すると分かりやすいかを検討した。まず第一に「実施日」が挙げられた。理由は、そもそも実施日を間違ってしまったら、会場に時間どおりに到着しても、練習試合は行えないからということであった。第二に「場所」が挙げられた。会場に至るまでにかかる時間を逆算するため、経路を確認するためなどの理由が話されていた。このとき、試合開始時間または集合時間が分からないと、そもそも逆算することもできないという意見が出され、最終的には一番目が「実施日」、二番目が「時間（試合開始または集合の時間）」、三番目に「場所」、四番目が「持ち物」という配列が望ましいという結果に至った。

話合いは生徒に任せ、特に教師が質問をしたり支援をしたりすることはなかったが、生徒の日常生活に密着した場面設定だったため、主体的な関わりが見られた。特に、項目の配列を意識したことによって、自分たちの普段のメールでのやり取りを見直しながら、活発な話合いがなされていた。日々のSHR時に生徒が教科等の連絡を行う際にも応用できる、実生活に結び付いた活動となった。

(2) オリンピックの競技について説明する（本時）

生徒たちは、2020年の「東京オリンピック・パラリンピック競技大会」に高い関心を寄せている。以前、2020年の東京オリンピックで実施される33種目の競技名を生徒に聞いたことがあったが、ほとんどの種目を答えることができ、かつどのような競技であるかも認識していた。生徒に馴染みのない新競技についても、少しヒントを与えると、すぐに競技名を答えることができた。

そこで、本時においては、いくつかの競技を選定し、各グループに振り分け、その競技を説明するという活動を設定した。競技の選定にあたっては、カヌー、ボート、レスリング、ボクシングなど似通った競技を選んで振り分けることで、競技の特徴を捉え、説明を工夫することを意識させるようにした。また、説明を工夫するという点については、専門用語やカタカナ語、選手の名前などのNGワードの設定も行った。

授業においては、3～4名でグループを編成し、各グループに教師から振り分けられた競技についての説明文を考えさせた。グループ間で説明する競技が重複してしまうことを避けるため、今回は教師から担当する競技を指定してしまったが、説明する際にイメージがわかりやすいように、各グループには競技の写真を配付した。NGワードを設定したことにより、NGワードを使用せずに〇〇を説明するにはどうしたらよいか、と説明に使用する文言の検討が活発に行われていた。

クイズ、この競技は何でしょう？

2年 組 番 氏名 []

問、下記のNGワードを避けて、写真を見ながら、競技についてわかるように説明してみよう。

※1、NGワードを避けて、上手に他の言葉で説明すること。

※2、他の人がこの説明を聞いて、どの競技の説明なのか、わかるように説明すること。

本時のねらい自分たちのグループで、伝わりやすくするための工夫をして発表に臨むこと。

競技名 **ボクシング**

説明（発表原稿）

レクリエーション、小さな球、1つの箱を叩く、白い四角
上から下まで、上から下まで、上から下まで
この競技は、身体を動かして、上から下まで、上から下まで
でも、1つの箱を叩く、上から下まで、上から下まで
1年1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組
1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組
1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組
1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組、1組

NGワード

外来語全般・専門用語・クラブの名前全般・選手の名前

クイズ、この競技は何でしょう？

2年 組 番 氏名 []

問、下記のNGワードを避けて、写真を見ながら、競技についてわかるように説明してみよう。

※1、NGワードを避けて、上手に他の言葉で説明すること。

※2、他の人がこの説明を聞いて、どの競技の説明なのか、わかるように説明すること。

本時のねらい自分たちのグループで、伝わりやすくするための工夫をして発表に臨むこと。

競技名 **ホッケー**

説明（発表原稿）

男女共に、競技として、出場、試合が行われます。
必要に応じて、みんが、試合が行われます。
各、試合に行ける、試合が行われます。
個人種目ではなく、団体種目です。
試合は、試合が行われます。
日本選手への、試合が行われます。
道具が必要で、試合が行われます。

NGワード

外来語全般・専門用語・選手の名前

図1 説明が記入されたワークシート

次にグループごとに考えた説明を発表した。発表を聞いている生徒は、要点を捉え、競技名を考えて当てるよう指示した。注意深く聞き取りながらメモをとったり、内容に関して自発的に質問したりする姿が見られた。また、発表の内容をグループで反復して確認したり、聞き逃した部分をもう一度聞き直したりと、どのような競技についての説明なのか、よく聞き考えていたようである。

発表を終えると、「みんなが知っている言葉が出てくると分かりやすい」、「競技中の状況を説明されると分かりやすく感じる」、「場所や人数についての説明があると分かりやすい」、「自分がやったことのない競技は、観戦する立場の視点からの説明があるとイメージしやすい」などという声が上がった。

以下に、生徒たちが書いた説明文を示す。

〈聞き手に分かりやすいと評価された説明〉

【ゴルフ】

- ・個人種目。
- ・止まっている状態の小さな球を一つの指定された穴に何回で入れることができるかを競う。
- ・特徴は、砂場に球が入ってしまうと出すのがとても大変。
- ・何カ所かの場所を回り、打った回数の少ない人が勝利する。

〈聞き手が他の競技と混同した説明〉

【ホッケー】

- ・男女ともに出場できる。
- ・屋内・屋外両方で行える。
- ・冬季にもある。
- ・団体種目。
- ・点を量産した方が勝ち。
- ・日本生まれの競技ではない。
- ・木で作られた道具を使用する。
- ・みかんのような丸い物を道具で飛ばす。

〈聞き手が他の競技と混同した説明〉については、どのように得点されるのか、どのような木の道具なのか、具体的でないために、競技の全体的なイメージがしづらかったようである。競技のこれといった特徴が説明されず、他の競技と混同している生徒が多く見られた。

各グループの発表を振り返って、工夫されていた点等を自分のグループの発表と比較して考えさせたが、生徒は、長々と説明すれば伝わるわけではないことを実感していたようである。相互評価を行った際の意見としては、全体像から徐々に細かい視点に移動してゴルフの説明を試みたグループが最も分かりやすかったとされた。第1次第1時の配列を意識した連絡についての学習とも関連付けることができた。さらに、相手に説明するためには、まずは自分が説明する事柄について理解していなければならないという新たな課題も見いだすことができた。

クイズ解答用紙

2年 SS組 番 氏名 []

問題番号	問題文	解答
A	ゴルフは、砂場に球が入ってしまうと出すのがとても大変。	ゴルフ
B	木で作られた道具を使用する。	ホッケー
C	個人種目。	ゴルフ
D	点を量産した方が勝ち。	アイスホッケー
E	屋内・屋外両方で行える。	アイスホッケー
F	冬季にもある。	アイスホッケー
G	団体種目。	アイスホッケー
H	日本生まれの競技ではない。	アイスホッケー

図2 発表を聞いた際のメモ

(3) ことわざでクイズをしよう

第2次第2時（本時）の学習から見いだされた「相手に説明するためには、まずは自分が理解していなければならない」という新たな課題を解決するために、相手に話したり、説明したりする前段階として調べ学習の時間を設けた。現代文Bの授業で「情けは人のためならず」に関する評論文を学習していたので、ことわざをテーマとした。教師がいくつかのことわざを提示し、生徒はそれらを調べ、調べたことわざを説明して、どのようなことわざが説明されているかを考えるというクイズ形式をとった。ことわざを調べる際には、意味だけでなく用法や誤用など幅広く関連事項を調べること、これまでの活動を生かし、説明を聞く際には必ずメモを取ることを指示した。また、今回の活動においては、ことわざを当てるために必要な情報を得るための質問をする活動を取り入れた。

調べ学習の時間にはパソコン室を使用した。教室で行われる授業と雰囲気が変わり、生徒はのびのびと調べ学習を行っていた。同時に図書館を開放し、パソコンだけでなく、書籍を用いて調べたり、グループで調べたことをまとめたりする場所として提供した。生徒は時間内に、しっかりと調べ学習を終了させるため、グループ内で協力して活動していた。調べた内容についても、生徒同士で対話を進めながら、必要な情報を幅広く収集していた。講義形式で一方向的に学習するよりも、それぞれのことわざに対する理解を深めていたようである。

二つの国の習慣を調べよう		2年 組 番 氏名 []	国名	国名
① 犬を飼う習慣	② 犬を飼う習慣	③ 犬を飼う習慣	④ 犬を飼う習慣	⑤ 犬を飼う習慣
⑥ 犬を飼う習慣	⑦ 犬を飼う習慣	⑧ 犬を飼う習慣	⑨ 犬を飼う習慣	⑩ 犬を飼う習慣
⑪ 犬を飼う習慣	⑫ 犬を飼う習慣	⑬ 犬を飼う習慣	⑭ 犬を飼う習慣	⑮ 犬を飼う習慣
⑯ 犬を飼う習慣	⑰ 犬を飼う習慣	⑱ 犬を飼う習慣	⑲ 犬を飼う習慣	⑳ 犬を飼う習慣
㉑ 犬を飼う習慣	㉒ 犬を飼う習慣	㉓ 犬を飼う習慣	㉔ 犬を飼う習慣	㉕ 犬を飼う習慣
㉖ 犬を飼う習慣	㉗ 犬を飼う習慣	㉘ 犬を飼う習慣	㉙ 犬を飼う習慣	㉚ 犬を飼う習慣
㉛ 犬を飼う習慣	㉜ 犬を飼う習慣	㉝ 犬を飼う習慣	㉞ 犬を飼う習慣	㉟ 犬を飼う習慣
㊱ 犬を飼う習慣	㊲ 犬を飼う習慣	㊳ 犬を飼う習慣	㊴ 犬を飼う習慣	㊵ 犬を飼う習慣
㊶ 犬を飼う習慣	㊷ 犬を飼う習慣	㊸ 犬を飼う習慣	㊹ 犬を飼う習慣	㊺ 犬を飼う習慣

図3 調べ学習に用いたワークシート

次に、調べたことわざを用いて、どのことわざについて説明されているかを当てるクイズを実施した。一回のクイズにつき、質問するグループ、説明するグループ、ことわざを当てるグループと担当を割り振って行い、その他のグループの生徒は、ワークシートに、交わされるやりとりのメモを取った。ことわざの説明、質問、解答についてはグループの代表者が教室の前に出て行った。どんなことを質問するか、質問の内容が適切でないと、正解のことわざにたどり着けないこともあって、要点を聞き取ろうと集中する姿が見られた。また、質問に対して、すぐに正答に結び付くような受け答えにならないよう頭を悩ませていた。

クイズ このことわざは何でしょう？		2年 組 番 氏名 []	質問事項	質問への回答() 班	ことわざ
〈ねらい〉 - 自分が解答する上で、必要な情報を質問し、聞き取ることができる。 - 調べたことを活用し、知識の定着ができる。 〈方法〉 ① 前に立ったグループが、クラスに向けて、指定されたことわざについて質問する。 (1) どのような場面で使われますか (2) どんなことがきっかけで作られたことわざですか という質問は共通の質問とし、その後はその場でグループで話し合い、質問内容を決める。 ※グループでの質問は Yes か No で答えられるものとする。 ② グループで質問の答えから、指定されたことわざを選ぶ。 ③ 答える側は、次に前に出るグループとする。 ④ ジェスチャーは禁止。 ⑤ 質問する側も答える側も、直接的なものは禁止とする。 ことわざの意味を伝え合うことは NG。あくまで、対話の中でことわざを選ぶこと。 (例) ○ 動物が含まれていることわざか？ ○ ネガティブな意味か？ ポジティブな意味か？ × 犬という言葉が入っているか？ × ○○という意味であるか？ ⑥ 例題グループは、聞き手となり、対話についてメモをとることを、このことわざの指定は教員がするものとする。	質問内容 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ
質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ
質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ	質問事項 質問への回答() 班 ことわざ

図4 メモと質問事項

全ての活動を振り返って、生徒は、自分たちで調べて得たことを伝えることに、非常にやりがいを感じているようであった。一人では調べきれなかったことを、他のグループのメンバーが調べていた場合もあり、クイズに答える目的だけでなく、自らが知りたい情報や知識に対して自然と生徒同士の対話が進められていた。グループでの活動や、聞く、メモを取るという活動を繰り返してきたせいか、役割が与えられていない場合も、生徒たちは主体的にメモを取り、聞き取った内容について言葉を交わし、自らの学習を進めていた。今回は、インプットした知識や情報を

アウトプットすることによって、生徒の学習の定着へとつなげることができたのではないかと考える。以下、クイズの中で交わされた質問と受け答えの一例を示す。

【虻蜂取らず】

Q 1：使用される場面は？

A 1：欲しい物が二つあって、どちらとも手に入れようと頑張ったけど、欲張った結果どちらも手に入らなかった時。

Q 2：生き物は含まれるか？

A 2：含まれている。

Q 3：その生き物はどのような動作をするか？

A 3：主に飛ぶ。

【背水の陣】

Q 1：使用される場面は？

A 1：例えば、会社の上司に「もう一度だけチャンスをやる」と言われた時など。

Q 2：誤用はあるか？

A 2：「引く」という言葉をつけると誤り。

(4) その他の実践

1学期に進路ガイダンスを行った際、ただ話を聞いているだけで、メモを取ることができず、内容が理解できなかったり、聞いたことをすぐ忘れてしまっていたりした生徒が多かった実態を踏まえて、帯単元を設定した。国語表現の導入の時間として毎時間、開始10分程度をあて、聞き取りを中心とした活動を組んだ。また、生徒の進路実現に向け、新聞を読むことの抵抗をなくしたいという意図もあり、教材には新聞記事を用いた。先ず1学期は、聞き取ることを重視し、聴写からスタートした。生徒は、新聞記事を読み上げる教師の言葉を一字一句もらさず書き留めていった。音声で聞いて、何となく分かったつもりになっても、いざ文字へ変換しようとするとな対一の変換ですら難しいことを実感していた。単に聴写するだけでなく、必ず記事を読み返し、全文を漏らさず聴写しているか確認していく活動を繰り返すことで、漢字の知識の定着を図ることもできた。

2学期からは、教師が読み上げた新聞記事の内容について、自由にメモを取り、要点をまとめようとして、自分が気になった点について簡単に意見をまとめ、感想を書くという活動を実施した。1学期に行った聴写で、聞くこと、聞いて書くことに慣れていたため、要点を的確にメモできるようになっていた。教師が読み上げる新聞記事については、本校の生徒の実態に合わせて選定した。時事問題を主として扱ったが、さまざまなジャンルの記事を読み、聞き取りを行わせることで、生徒の興味関心の幅を広げ、教養を深める一助ともなったと考える。

次の段階としては、キーワードを抜いてある新聞のコラムを読ませ、書かれている内容からキーワードを考えるような活動を行い、要約を中心に、書くことの力の育成にもつなげていきたい。

5 更なる改善に向けて (成果と課題)

(1) 効果的な説明の方法について理解する

ア 成果

生徒にとって非常に身近な部活動について、場面を設定したため、自分たちで課題を解決しようという意欲が見られた。部活動の連絡は生徒にとって必要かつ重要なものであり、併せてこの授業を実施した時期に、文化祭、修学旅行と学校行事が続いていたこともあり、生徒は授

業と実生活とのつながりを実感することができた。

(2) オリンピックの競技について説明する（本時）

ア 成果

自分が理解していないことを説明することは難しいという根本的なことを、生徒が自ら見いだした実践となった。選んだ言葉、どのような順序で説明したか、それらによって相手に伝わるか、伝わらないかが左右されるということを学ぶことができたと考える。どうしたら伝わるのか、それをしっかりと考えることの大切さを生徒は感じていたようである。

相手の話を聞く際にも、ポイント（本時の場合は競技の特徴）をつかむことができれば、全体のイメージを膨らませることができることが分かった。相手にする説明を考える際に、制限を設けたことにより、生徒があれこれと試行錯誤できたことも成果の一つと捉えている。

イ 課題

「相手に説明をする」とは、どういうことかの意識統一が図れていなかった。そのため、「シンプルの方が分かりやすい」、「これを言えば分かる」と安易に判断してしまったグループがあった。初めに、グループの中で説明事項を大まかに挙げさせ、どのような順序に並べたら分かりやすいかを意識して並べ替え、説明として組み立てる、という過程をたどらせる必要があった。前時に事項の配列の重要性を学習していたが、それに頼らず復習の時間を設けるべきであったと考える。

授業の目標の共有が十分でなかったことも課題である。どうしたら相手に伝わる説明になるかを考えること、相手が話す内容の何がポイントなのかを聞き取ること、が目標であったが、競技について詳しく知っているか知らないかに左右されて、考えを深められない生徒が見られた。中には、発表が上手にできなかったため、評価が下がることを気にする生徒がいた。授業の目標をしっかりと伝えられなかったことを反省した。また、生徒が説明する競技の選定についても、教師の意図が上手く伝わりきらなかったと感じる。授業の振り返りを丁寧に行い、なぜその競技を選定したかなどについても考える時間を設けるべきであった。

(3) ことわざでクイズをしよう

ア 成果

現代文Bの授業と内容について関連させたので、生徒は違和感なくことわざについての知識を吸収していた。自分が調べて得た成果を活用して、次の活動に取り組みさせたため、生徒は意気込んで調べ学習に臨んでいた。また、質問をすることで、自分が知りたい情報が得られるため、聞く際も、質問を考える際も集中して取り組んでいたようである。グループ内での対話も弾み、授業終了後には、もう少し時間をかけてほしかったという意見も見られ、主体性を育んでいくきっかけとなったと考える。

イ 課題

調べ学習について、インターネットの情報を活用したが、やはり情報の正確さという点では危うさを感じるがあった。その一方で、全員がほぼ同じサイトから情報を得ている場合もあり、正確さだけでなく、バリエーションが増えないという点でも課題があった。インターネット上に、どのような情報が流れているのか、生徒に調べさせる前に、教師がある程度把握しておかなければならないと感じた。また今回は、教師が提示したことわざを、全員が全て調べるように指示したが、グループごとに調べることわざを指定したり、そもそもことわざを選定する際に、「生き物が含まれる」、「誤用されやすい」などのテーマを設定してことわざを選定したりしてもよかったかもしれない。

また、前時の反省を生かし切れず、今回に関しても目標の共有が不十分であった。やはり、生徒によっては、ことわざが難しく理解できないために評価が下がってしまうのではないかと発表そのものの出来映えとかを気にしていた。自分たちが得た知識をどう説明するか、自分たちが必要とする情報を引き出すために、どう質問をするかをグループ内で意見交換して、

作り上げていく、その目標をしっかりと認識させるべきであった。単元の最初に、目標を説明するだけでなく、折りに触れて確認しながら授業を展開していく必要があったと考える。

(4) その他の実践

ア 成果

実生活や他教科とのつながりに気付くことができた実践であったと考える。1学期、2学期の取組に対して、生徒からは「授業中の先生の話聞き取れるようになった」、「速く書けるようになった」、「要点が分かるようになった」、「意外と知識が身に付いた」などの感想が述べられた。聞くことの力を育成するために設定した帯単元であったが、書くことへの抵抗がほとんどなくなり、アンケート等の自由記述欄への記述が増えたり、短い言葉で自分の意見を記入できるようになったりするなど、書くことの力の育成にもつなげられる可能性を感じた。中には、作文に書く内容が深まり、一つのものごとについて深く考え書くことができるようになった生徒もいた。

イ 課題

どのような実践でも同じであるが、やってみて成果が目に見えて、初めて活動の必要性を実感できるため、1学期に帯単元をスタートさせた当初は、生徒に聴写の必要性を理解させることが難しかった。また、生徒が聴写に使用したプリントは必ず提出させ、誤字脱字等をもう一度確認して、添削してから返却していたため、授業後の教師の作業が多くなった。

本実践全体を振り返って、生徒が意欲的に楽しく取り組めるように活動を考え組み立てていったため、主たる活動がクイズ形式のゲーム感覚で行うものとなってしまった。また、生徒同士の対話を重視したため、発表の仕方、言葉遣いといった基本的な事柄を見直す時間が少なかったことも課題と考える。「話すこと・聞くこと」の育成についても、しっかりと知識を身に付けたり、生徒がじっくりと考えたりする時間を設けることは必要である。帯単元の効果を検証したり、自らの授業技術を振り返って改善したりするなど、今後も「話すこと・聞くこと」の力の育成に向け、さまざまな取組に挑戦していきたい。

〔参考文献等〕

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』（平成21年）